

歌を作ること 佐佐木定綱

なぜ短歌を作るのか。

そんなことはあまり考えなくてもいいのだが(むしろそんなことを考えていると作歌ははかどらない。テスト前に、勉強する理由について考え出す学生と同様だ)、一応時評も最後なのでそんな根本的なことも考えておこうかと思う。

文系廃止論というところでもない話もあるし、パンのみにて生きるにあらず、短歌は別になくても困らない。今日から短歌を作るのも読むのも禁止、という触れ込みがでたところで生物学的に死ぬ人間はいないだろう。

単純に短歌が好きだから作り読む、という理由は素晴らしい。最上だろう。ただまあ「好き」というのは危険でもある。恋は盲目、好きなものはだいたいよく見えていない。歌人にとって歌が至上のものとなったらそれは危険だ。思考停止に他ならない。好きだからこそ、節度を保つのも必要なことだ。

ぼく自身は短歌が好きかと言われると、まあなんとも言いにくい。「嫌いじゃないけど……」とはぐらかす女性のような気持ちだ。谷川俊太郎が「私にとって必要な逸脱」という文で「心から詩を信じるということが、私にはかつてなかったし、またこれからはもないだろうと思う。(中略) また私には、心から詩に惚れたということがかつてなく、これからはないだろうと思う。」と書

いていたことが心のよりどころである。

ぼくは短歌的なつながりがありなく、文学的なつながりがない。短歌の集まりに行くと、ずいぶん違う地平に来たなど、異邦人のような感じがする。文芸学部を出て、本屋に勤めているのにそんなものかという感じもするが、そんなものだ。勉強もせず、不真面目に生きてきたので、類は友を呼ぶというものだろう。「短歌」四月号で坪内稔典が、小学生に俳句を作らせる話の中で、「小学生を相手にして面白いなと思うのは、今日のチャンピオンとしてのが決まるとその子は、だいたい勉強が得意ではない子。」と言っているのが心のよりどころである。

そんな中で短歌を作る。原則毎日(あくまでも原則)数首。一日一首でも一ヶ月で三十首できる計算だ。一年で三六五首。

毎日黙々と歌を作る。あとは雑誌を読んだり歌集を読んだり。好きな短歌をデータにしたり、勝手に一首評を書いたり。これだけ書くとなんと慎ましい生活というか、根暗というか。

カズオイシグロが対談の中で「誰かがあなたのところに来て、何らかの理由で、君の作品はどんなにすぐれたものであれ絶対に出版されないよ、誰も君の作品を読まないんだよ」といって、それでも書きたいか? その問いの答えがイエスでなければいけません」と述べている。

作品は読まなければそれは作品ではない。読まれることのない作品はもともと書かれなかったとしても変わりはないものだ。これは読み手を意識するかどうかとはまた別の話だ。

存在しないかもしれない歌を作りたいか。その絶望的な境にあっても「それでも」と言いながら作り続けなければいけない。